



この庭に

日向理恵子

この庭に、日ざしが真上からさした。

それをあいずに、あたしは、羽化をはじめた。

さなぎの背なかがわれて、空気が体をじかにさわる。光はまだ、ばらばらの破片だった。黒いまくが、あたしの上にかぶさっていて、それが日光をこまかにくだいていた。

細く六本にまとまった足を、慎重に外へだす。うっとりとしながら翅のしわをのぼしきるのに、うんと時間をかけた。

やがて翅がピンと張るのを、待ちきれなかった風が体ごと空中へさらってゆく。枯れ葉色にかわいたさなぎをのこして。

夜通しつづいた雨のために、景色はいたるところに水玉をたたえていた。

新しい手足は、緑とピンクのまだらをうかべて、ぎたぎたとひかる。さなぎのなかで設計された翅は、もう、空気をつかむすべをおぼえた。

あたしは、蝶になった。

高みからそそぐ日光に、宇宙からの力のうねりに、空気のつぶがおどりくるっている。葉っぱのはいた息も、ちりばめられた水玉も、人間の家の屋根も、ただけしい小鳥のはばたきも、すきとおるほど小さな羽虫も——すべてが、あたしを反射している。こちらへかえってくる反射は、どれもこれも、うつくしかった、力にあふれて、よろこんでいた。すべてが、新しいこの姿をうつしだしていた。

蝶になった、あたしは、蝶になった。

この瞬間、なにかもがうれしさに張りつめ、あたしは、